教職支援室便り（８月号）

令和６年　８月　９日　（金）
文責：教職支援室　曽我文敏
☎０９８５－２０－４８０８

教員採用選考試験：二次試験進行中

本年度の教員採用選考試験も、第二次試験が始まっています。すでに宮崎県では、第二次試験が終わりました。しかし例年より、全国的に試験日程に幅があることから、本学の学生の皆さんの中にも、第二次試験が終わっている人と、これから受験する人がいるなど、教職特別講座による支援も、まだ「これから」というところです。

第二次試験対策の演習は６月中旬から開始しましたが、このような状況から、８月下旬まで続けていくことにしています。２か月以上の長い期間の演習になりますが、学生の皆さんの懸命な取組は、私にもしっかりと伝わり、私自身の知力・体力の向上にもつながっています。本当にありがたいです。

＜受験を終えた学生の皆さんの思い＞

教員採用試験を受けての率直な感想は、これまで長い時間をかけてやってきたものが、本番ではすぐに終わってしまうのだと思いました。しかし、模擬授業の10分のために、面接の15分のためにどれだけ時間をかけても、かけすぎることはないと思います。私は、留学にも行っていたし、教育実習が終わってからは体調が優れなかったために、皆よりもはるかに対策をする時間が少なかったので、とても不安がありました。ですが、模擬授業を見てくれる友達がいたり、グループワークのアドバイスをくれる仲間がいたり、様々な角度から面接の試問をしてくださる先生がいたから、自信をもって試験に挑むことができました。講座を受けていなかったら、自分1人では「気づき」を持たせた授業ができなかったと思うので、多面的・多角的に考えて指導をしてくださった先生には、とても感謝しています。模擬授業や面接も何度も演習したから、臨機応変に対応することができたし、面接では自分の意見を伝えることができました。結果はどうなるかわかりませんが、個人的には模擬授業と面接に関しては、うまくいったかなと思います。グループワークは司会もでき、話合いをうまくまわすことができたと思います。講座を受けたことで、試験対策ができただけでなく、教職にかかる様々なことを知り、教職に対する理解も深まりました。これまで講座を受け持ってくださって、ありがとうございました。

教員採用選考試験に対して、これまで努力してきた成果を発揮することができて、良かったなと感じています。自分にできることをやり遂げることができたため、悔いはありません。不安もあり緊張しましたが、これまで頑張ってきたことを振り返り、自分に自信を持って試験を受けることができました。今回、人生でトップに入るくらいの達成感を感じましたが、これは教職特別講座で先生や仲間と学び、切磋琢磨した日々が作り上げたものだと感じています。教職特別講座を受講して試験対策を行うことはもちろん、教職理解をとても深められたおかげで、様々な面接試問に対しても話すことができました。ここで培ったものを、今後も生かしていきたいと思います。長いようであっという間でしたが、先生方や仲間とともに頑張ってきた過程そのものが、非常に有意義な時間であり、忘れられない経験となりました。

夏季教職特別講座：演習

面接演習

面接のオリエンテーションでは、２つの人物評価の視点（①教職への情熱、人柄、適性等、②教職教養に関する知識・理解）について、試問例を示しながら解説しました。全国的な傾向としては、教職への情熱、人柄、適性等についての試問（通常試問）が、多く行われています。しかし、教職教養に関する知識・理解（教職教養試問）を取り入れている自治体もあることから、受験自治体によっては、教職教養試問も交えて演習しています。また、本年度は、４６１の試問数で構成される試問集を作成し、演習に役立てています。

＜面接演習の方法＞

面接力を付けるためには、演習を積み上げていくことが重要です。しかし、単に演習を繰り返すのではなく、面接に係る自己の課題を意識して取り組むことが求められます。その結果、面接者に訴える力が身に付いていきます。具体的には、応答に余裕が感じられるようになり、その内容にも深まりが見られるようになります。

演習は、次の要領で行います。

① 面接演習でのやり取りを録音する。
② 各自録音を再生して、質問したいことや確認したいことを明確にする。
③ ②をもとに、担当教員に質問や確認を行う。

模擬授業演習

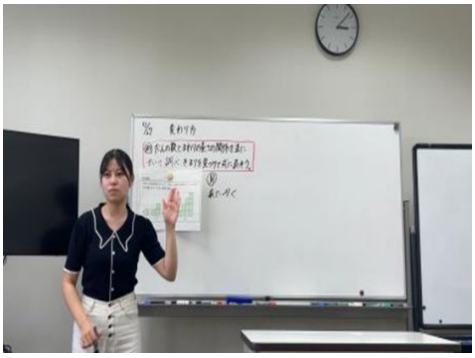
模擬授業についても、実践的な演習を行っています。本年度も、模擬授業の目的、評価の視点、評価項目、面接者の試問例、留意事項等についての、オリエンテーションからスタートしました。

本年度も、中学校・高等学校の英語科に関する模擬授業試験を受験する皆さんがいることから、本学の英語科の先生方にも指導助言をお願いしています。小学校を受験する皆さんも含めて、日を追うごとに、模擬授業力向上への意欲の高まりが見られ、力を付けているのがわかります。

＜模擬授業演習の方法＞

模擬授業演習についても、積み上げていくことが重要です。一人での演習、同じ校種の人との演習など、演習形態を工夫して取り組むことが求められます。特別講座のときには、同じ校種の人との演習が適していると考えます。相互に模擬授業を参観し批評し合うなど、協力して高め合っていく姿を期待しています。

演習は、次の要領で行います。



○　小学校、中学校・高等学校のグループごとに演習を行う。
○　採用試験における模擬授業時間を確認する。
①　授業を始める前に、模擬授業に関する自己課題を発表する。
②　他の人にタイムキーパーを依頼する。
③　模擬授業を行う。
④　参観者から、質問や感想を出してもらう。
⑤　次回の自己課題を明確にする。

グループワーク演習

＜グループワーク演習の方法＞

グループワークの試験においては、「独断型・自信過剰型」や、「追従型・イエスオンリー型」として評価されることは避けたいところです。

ここで重要なポイントは、リーダー的要素とフォロワー的要素のバランスです。その時間の中で、両者が適度に見られることが、高い評価につながります。積極性や協調性は、教員に求められる重要な資質・能力です。本演習の中では、リーダーとして、フォロワーとして、自分がバランスよく問題に対応しているかについて、学生の皆さん同士が、相互評価を行いながら演習を進めています。

演習は、次の要領で行います。

①　自分の考えを、多面的・多角的な視点で整理しておく。
②　常に前向きに、活動を前進させる発言に努める。
③　「積極性」と「協調性」のバランスに配慮する。
④　活動プロセスを想定しておく。
　・第１段階～各自の考えの発表
　・第２段階～全員の考えの整理・統合
　・第３段階～整理・統合した内容の検討
　・第４段階～総合的なまとめ
　・第５段階～発表

道徳の教科化に思う！（シリーズ８７）

平成２９年の６月号から、「道徳の教科化に思う」をテーマに、道徳授業の本質的な在り方等について連載しています。

今回は先月号からの続編で、「読み物教材への理解」、「読み物教材の活用への理解」について述べます。

１　読み物教材への理解

(1)　読み物教材と教師の資質・能力の向上

これまで道徳授業に読み物教材を活用してきたことは、教師の資質・能力の向上にも大きな影響を与えてきたと考える。その前提となるのは、教師が読み物教材の、登場人物の道徳的価値観を追求する中で、人としての在り方・生き方についての、考えを深めることができる学習者であること。そのような教師は、自他を尊重する精神（人間尊重の精神）をもち、児童生徒等から信頼を得る中で、学習指導や生徒指導に優れた指導力を発揮する。

また、読み物教材の研究は、国語科における文学的文章の指導力向上にも、重要な役割を果たしてきた。教師の読み物教材を読み解く力は、国語科においても文学的文章の主題の理解や、叙述に即した読み深めの指導の充実にもつながる。

(2)　読み物教材と読書活動の充実

児童生徒が、教科用図書や副読本等の読み物教材に親しむことは、読書活動の充実と読解力向上につながるとともに、その積み重ねにより、自然や人への見方・考え方が豊かになるなど、豊かな心が育成されると考える。私が学級担任をしていたとき、児童の中には、道徳の副読本のすべての読み物資料を、何回も読んでいた者が複数人いたことを覚えている。道徳科の時間が好きな児童生徒を育てることは、読み物教材が好きな児童生徒や、読書が好きな児童生徒を、育てることにつながると主張したい。

(3)　読み物教材のよさと教師の指導力

読み物教材の中には、小学校教材「手品師、銀のしょく台」、中学校教材「足袋の季節、二通の手紙」など、多くの出版社に採用されている、不朽の名作と言われるものもある。そして、ひとつひとつの読み物教材は、学習の素材としての価値を有する。それらの中には、作者の意図する主題があり、学習者に伝えたいこと、学んでほしいことが含まれている。しかし、それらをどのように活用するか（「ねらい」の設定、発問構成等）など、効果的に教材化するためには、教師の指導力（教材分析力）に負うところが大きい。そこには、表現されている文や言葉を読み解く力や、授業を構想する力が求められる。読み物教材のよさを損なうことがないよう、教師の教材を見抜く力が重要となる。

２　読み物教材の活用への理解「比較できない２つの価値の取扱いに関すること」

読み物教材の中には、比較できない２つの価値について考える教材がある。例えば、「自分の命を守る価値」と「他者の命を守る価値」などである。両者の価値が実現している教材であればよいが、そうではない場合は、慎重な教材研究が求められる。一面的な見方・考え方で、自分の命を亡くしてまで、他者の命を守ろうとする行為を評価することはどうなのか。私が出会った実践事例の中から、小学校第６学年教材「ラッシュアワーの惨劇（出典：学研教育みらい）」を取り上げる。

１　教材名
小学校高学年教材「ラッシュアワーの惨劇」
出典：学研教育みらい

２　内容項目
Ｄ－（１９）「生命の尊さ」

３　教材内容
平成１３年１月２６日、夜７時過ぎのことだった。東京都新大久保駅は、都心から家に帰る人々のラッシュアワーで、ごった返していた。その中で、酒に酔った１人の男性が線路に落ちてしまう。そのとき、それに気付いた２人の男性は、落ちた人を助けようと線路に飛び降りる。直後、３人の姿は、電車に吸い込まれていった。すぐに救急隊が駆け付けたが、３人の命は絶えていた。

４　主な発問
○　教材を読んで、どのようなことを考えましたか。
○　自分だったら、どうしていますか。
ホームに人が落ちたとき、あなたは、助けに行きますか、行きませんか。その理由も発表してください。
※　グループで、お互いに考えを出し合いましょう。自分の考えが変わった人はいませんか。

自分の命と他者の命は、どちらも守らなければならない命（価値）であり、自分だったら助けに行くか、行かないかという、究極の二者択一の発問は、児童にとって厳しい選択であったと考える。本教材は、生命の尊さをねらうものであり、命を助けようと飛び降りた２人の勇気ある行動には、言葉で言い表せないほどの、尊い価値観を感じるのであるが、一方で教材からは、他の人に与えた深い悲しみも伝わってくる。ホームに落ちた男性の、命だけを見つめた２人の思いや尊い命について、家族や友人などの様々な立場でも考える学習を展開したい。そして、生命はかけがえのないものであることを自覚できるような、本教材の活用を構想したい。